
《研究ノート》

水と命の物語

——レスリー・マーモン・シルコーの「雨雲を届ける人」
(翻訳を含む研究)

茅 野 佳 子

＜アブストラクト＞

米国南西部に位置するニューメキシコ州には、19の「プエブロ」と呼ばれる先住民族の保留地がある。乾燥した高地に暮らすプエブロの人々は、大地と空の間を循環し命を育む水の物語を、日々の暮らしの中で語り、後世に伝えてきた。本稿では、アメリカ先住民文学を代表する作家の一人であるラゲーナ・プエブロ出身のレスリー・マーモン・シルコー（Leslie Marmon Silko 1948～）が、ニューメキシコ大学在学中に書いた短篇「雨雲を届ける人」(“The Man to Send Rain Clouds” 1969)を取り上げ、歴史的・社会的・文化的背景を踏まえ、全訳と考察を試みる。

＜キーワード＞

ニューメキシコ、プエブロ、水、アメリカ先住民文学、レスリー・マーモン・シルコー

1. ニューメキシコとプエブロの歴史

「雨雲を届ける人」(“The Man to Send Rain Clouds” 1969)の翻訳と考察を試みるにあたり、まず著者レスリー・マーモン・シルコー（Leslie Marmon Silko 1948～）が生まれ育ったニューメキシコとプエブロの歴史をまとめておきたいと思う。プエブロとは「村・共同体」という意味のスペイン語に起源をもつ語で、ニューメキシコ州北部のリオグランデ河沿いから北西部にかけて暮らしている19の先住民族、およびその自治国家の総称となっている。^(注1)(地図1、2)

米国南西部に位置するニューメキシコ州はアラスカ州に次いで先住民族の人口比率が高く、2010年国勢調査によると州人口の10.2%を占める。16世紀にスペイン人が侵入してくるはるか以前からこの地域の乾燥した高地に暮らしていたプエブロの祖先は、大地と空との間を循環し命を育む水の物語をその世界観にとりこみ、生きるための知恵と信仰を日々の暮らしの中で確認し、記憶し、後世に伝える文化を作り上げていた。白人による侵略と支配の進む中でプエブロの人々も多くの土地を奪われたが、先祖の土地に住み続けることができたため、アメリカ先住民の中では独自の文化や生活様式がもっとも維持されている

民族であると言われている。

しかし、スペイン領土、メキシコ領土を経て、1850年にアメリカ領土となったその歴史は、土地、言葉、文化、信仰を守るための闘いの歴史でもあった。16世紀末にスペイン人がこの地域の植民地化を始め、やがて教会の建設と維持のための労働や、エンコミエンダと呼ばれる土地制度の下で農作業と作物の献納を先住民に義務づけ、伝統的な信仰に対する抑圧を強めていった。その事態を深刻に受け止めたプエブロのリーダーたちは、サン・ファン・プエブロのリーダー、ポペイの指揮の下に、伝統信仰と部族の存続をかけて反乱を起こした。歴史に残る1680年の「プエブロの反乱」である。

今も残る全プエブロ評議会と呼ばれる連合組織は、スペイン人入植以前から存在したと言いつづけており、反乱の前には代表が集まり、入念な計画を立て、一致団結して行動を起こしたという。その結果、総督を始めとするスペイン人入植者をすべて追い出し、自治をとりもどすことに成功したのである。この反乱がなかったらプエブロの文化、信仰、コミュニティは失われていただろうと考える人も多い。プエブロの反乱は、この地域の抑圧された少数民族が支配者の圧倒的な力に結束して立ち向かい、目的を果たしたもっとも古い抵抗運動で、その成功の鍵は組織力と団結力だった。

その後12年間、プエブロの人々はもとの暮らしを取り戻し、伝統信仰を続けることができた。1692年に戻ってきたスペイン人は、以前のように伝統信仰を妨害することはなくなり、入植者とプエブロ住民との間に交流が生まれ、協力関係が築かれていくことになる。再征服は必ずしも平和的なものではなく、多くの犠牲者が出たことも指摘されているが、スペイン人はこれを「平和的な再征服」(peaceful reconquest)と呼び、異文化共存への道を開いた出来事として評価し、1712年以後毎年9月にサンタフェで大規模なフィエスタを開催するようになった。

やがて19世紀半ばにニューメキシコがアメリカの領土になると、プエブロの人々は再び大きな危機に直面することになる。1887年に制定された「ドーズ法」(土地割当法)の影響は免れたが、その後資源価値の高そうな土地を政府に奪われ続け、1922年に、先住民の土地をさらに解体させ保留地の不法滞在者の土地所有権を認めやすくする「バーサム法案」が議会に提出されたのである。共同体の土地を失うことは、土地に根ざした共同体そのものを失うことであった。タオス・プエブロ周辺に集まっていた白人アーティスト、作家、人類学者、人権活動家たちの間で、先住民をサポートする動きが強まり、先住民と白人の連携プレーが議会に大きな圧力を加え、法案は結局議会を通らなかった。

当時、各地に作られたインディアン寄宿学校では、親元やコミュニティーから引き離された子どもたちに、部族の言葉や風習を忘れさせるべく、徹底的な同化教育が行われていた。1923年には、内務省インディアン局のチャールズ・パーク局長が、先住民の伝統的な踊りを禁止する条例を発令する。この危機を乗り越えるために、再び全プエブロ評議会が招集され、宣言書を作成し、15のプエブロのリーダーがこれにサインしたという。この宣言は、ヘイメス・プエブロ出身の歴史家ジョー・サンドー (Joe Sando) がその著書の中で紹介するまで、公の目に触れることはなかった。外に向けて宣言するためというより、プエブロのリーダーの間で確認するための決意書だったようだ。この宣言の後、踊りは人目を避けて秘密裏に守られていくことになった。今でも多くのプエブロでは、外部に公開せず部族の中だけで密に行われる大切な儀式があるという。^(注2)

政府に対する先住民の抗議運動を支援してきたジョン・コリアが、1933年にインディアン局の局長に就任し、翌年「インディアン再組織法」が制定される。同化政策や土地政策の改善、自治政府の設立等を目指したこの法により、伝統的な儀礼や文化の維持は容認されることになる。教育に関しては、寄宿学校の多くが解体され、保留地内にデイ・スクールが作られた。インディアン局の運営するデイ・スクールでは、再組織法後も英語による同化教育は続いたようだが、親元から通えることのもつ意味は大きかった。一方、この法の実施と効果に関しては問題点も多く、部族内の対立構造や米国政府との従属関係を生み出し、鉱山開発や企業進出による深刻な環境問題を招くことになったという指摘もある。

コリアは、連邦政府との話し合いや交渉を円滑に進めるために部族政府と部族憲法の確立が必要だと考えたのだが、決断を各部族に任せたため、受け入れない部族もあった。先祖の土地に暮らし、伝統的な生活や文化が根強く残るプエブロの共同体をモデルにしていたため、すでに先祖の土地を追われ、厳しい同化政策により伝統文化も言葉も失っていた部族にとっては現実的でなく、伝統的な統治形態を維持していた部族にとっては、新たにアメリカ式の部族政府を作ることは伝統を脅かすものであった。しかし、結果的に約三分の二の部族が法に従うことを決めた。以後、対外的な交渉や経済政策、カトリック教会の仕事や維持に責任をもつ「世俗政府」と、伝統行事や保留地の管理を司る「伝統政府」の両方の組織をもち、後者が毎年行われる儀式や踊りの指揮をとっているプエブロもあるという。「再組織法」の影響は部族によって異なり、その評価は今も分かれるが、保留地の土地の分割・流出に歯止めをかけたことや、伝統文化の尊重、学校教育に関する改善を含め、それまでの政策を大きく転換させた点では評価されている。

1930年代にコリアの下で進められた教育改革に関して、触れておきたいことがある。寄宿学校が次々廃止されていく中で、プエブロの子どもたちの多くが学んでいたサンタフェ・インディアン・スクールは、全プエブロ評議会の希望により寄宿学校のまま存続することになった。職業訓練とともに伝統的な工芸をカリキュラムの中に取り入れ、やがて絵画や工芸を専門的に学べるプログラムを開設する。部族が運営する唯一の芸術大学であるインディアン芸術大学 (Institute of American Indian Arts) の前身であった。また、当時ニューメキシコ州の州都サンタフェでは、動物物語で知られるアーネスト・E・シートンが、自宅周辺に「シートン村」を作り、ウッドクラフト (森の中で生きる知恵と実践) 運動のリーダーを育てるため、「インディアン知恵の大学」(College of Indian Wisdom) を開設していた。インディアンに対する同化政策とは逆に、白人の子どもや大人に「インディアンの知恵」を学ぶ機会を提供し、プエブロのアーティストを講師として招くこともあったという。シートンは以前からコリアと親交があり、インディアンの権利回復のための活動が続けていた。コリアの改革を全面的に支援していたシートンの活動に、コリアも注目しており、インディアン局の職員やインディアン・スクールの教員が研修を受けにきたこともあったというが、こうした事実はあまり知られていない。この時代のインディアン教育政策とサンタフェを中心とする動きに関しては、さらに調査を進め、別途まとめたいと思っている。^(注3)

1950年代になると、部族の自立促進を名目に援助を打ち切る「終結政策」(Termination Policy) と、都市部への移住を勧める「転住プログラム」(Relocation Program) によって、政府は再び部族の解体とアメリカ社会への同化を押し進めるようになっていく。しかしプエブロでは、いったん保留地を離れても帰ってくる者や保留地とのつながりを持ち続ける

者が比較的多かった。先祖の土地に住み続け、土地に根ざした生活を続けてきたプエブロの人々は、いくつもの危機を乗り越え、他文化を柔軟に受け入れつつも伝統文化を維持することができた。今でも、祝祭日にプエブロを訪ねると、教会でのミサに続き、終日伝統的な踊りが続くのを見学することができる。大地を共有するあらゆる生き物とのつながりを確認し、感謝と祈りを捧げる神聖な踊りは今も見事に継承されている。

2. 作家と作品

シルコーは、1948年3月5日、ニューメキシコ州アルバカーキに生まれ、ラグーナ・プエブロの保留地で、曾祖母や大叔母や周囲の年長者たちからラグーナに伝わる伝説や昔話を聞いて育った。祝祭日には、まだ歩けない頃から父に連れられて、広場で行われる伝統的な踊りを見に行っていたようだ。(写真1) シルコーの曾祖父はオハイオ州出身の白人で、ラグーナの女性と結婚し、ラグーナの言葉ケレス語を学び、ラグーナに住んで、二度とオハイオに戻ることはなかった。曾祖母や祖父母の世代は、インディアン寄宿学校で英語による同化教育を受けた世代だが、家ではよくケレス語を話していた。曾祖母は幼いシルコーによくケレス語で話しかけたが、ある時期から英語でしか話しかけなくなったという。父はケレス語を話さず、シルコーも幼い頃から英語を話していたので、保留地の幼稚園でケレス語を話すのを禁じられても問題はなかった。^(注4)

シルコーは、保留地のデイ・スクールに4年間通った後、アルバカーキ市内のカトリックの学校に進んだ。1965年にニューメキシコ大学に入学し、英文学を専攻した。在学中に結婚して息子が生まれるが、やがて離婚。卒業後、大学院で法律を学ぶが、途中で退学し、再婚してアラスカ州ケチカンに移り、やがて詩を書いて認められる。その後ラグーナに戻り、1977年に出版した小説『儀式』(Ceremony) で高い評価を受け、一躍先住民文学を代表する作家の一人となった。現在はアリゾナ州ツーソンに住んで、執筆を続けている。

シルコーがまだ作家を志す前の1967年、大学在学中に創作クラスの課題として書いた短篇「雨雲を届ける人」は、69年に文芸誌に掲載され、74年に刊行された同タイトルの短編集と、81年刊行の『ストーリーテラー』(Storyteller) に収録された。1978年のインタビューでシルコーは、この話がどのようにして生まれたのかを語っている。大学在学中、週末にはよくラグーナに帰り、村のニュースや話に耳を傾けていたのだが、ある週末、ヒツジの番をしていて亡くなった村の老人の話聞いた。そして、死後1~2日経って家族が老人を見つけたときには、ヒツジは辺り一面に散らばっていたことや、その死を神父に知らせず自分たちで埋葬をしたために、神父を怒らせてしまったことなどを知った。その後、大学の創作クラスで短篇を書くという課題が出たときにこの話を思い出し、家族が老人を見つけたときの様子や、神父の心情を想像しながら書き上げたという。(Seyersted 29) 民族の歴史と世界観が凝縮された示唆に富む作品だが、これまで先住民文学の研究者の間ではあまり取り上げられてこなかった。

この作品の主要テーマは二つある。一つは長い歴史の中で土着化したカトリック教会とプエブロの人々との関係、もう一つは乾いた大地に暮らすプエブロの人々の間で語り継がれてきた「死者は雨雲になってもどってくる」という世界観である。短く読みやすい作品だが、アメリカ南西部の自然や、この土地の歴史、特にプエブロの人々がスペイン人の支

配やカトリックの影響の中で維持してきた伝統文化の根底を流れる思想を知らずに読むと、この作品を深く理解し、味わうことは難しい。シルコーのその後の作品を読み、作品の舞台となった土地を訪れ、プエブロの人々と実際に交流する中で、霧が晴れるように見えてきたこともある。

シルコーは死者と雨雲に関するプエブロの世界観について、複数の著作の中で繰り返し語っている。例えば、写真家である父親リー・マーモンの写真集『プエブロの想像力』(Pueblo Imagination 2003)への序文では、次のように説明している。先祖たちは乾燥した高地に暮らすうちに、長い歳月をかけてその土地で生きていく方法を身につけていった。人間は、雲や太陽、大地やそこに生きるすべてのものとつながっているのだということを学び、雲を見ると、先祖たちが生命を育む水となってもどってくるのだと考え、崇めるようになった。人間は自然界のすべてのものとつながっているというプエブロの世界観は、自然と人間を分断する西欧的二元論の影響が押し寄せる中でも、人々の潜在意識の中に残り、お祭りの日の衣装や装飾品、楽器等の色や素材やデザインの中に表現されている、とシルコーは語る。(9-10)

さらに、写真集に収められているバッファロー・ダンサーと雲の写真を取りあげて、次のように説明する。ダンサーの足と頭につけた白い房は雲を連想させるもので、本物の雲といっしょに一枚の写真の中に併置することで、両者の間に起こる「神聖な変化の過程」(a sacred transformational process)を見る者に伝える。(10-11) 実際に踊りの場で起こることが、一枚の写真の中で再現されているのである。プエブロの儀式に関する文献によれば、太鼓の音は大地の鼓動であり、手に持ったラトルの音は雨音を、長く伸ばした髪は雨を表しているという。(Bahti 21) このように、プエブロの踊りはその世界観を体現し伝えるという、重要な意味をもつことがわかる。(写真2)

マーモンの写真には、1940年代以降のラグーナ・プエブロの自然や建物とともに人々の暮らしが鮮明に記録されていて、この短篇に描かれているカトリック教会の建物や、短篇の中で神父が言及するお祭りの日の様子なども知ることができる。また、マーモンの写真にはお年寄りの穏やかで威厳のある表情をとらえたものも多く、シルコーは写真集の序文を次のように結んでいる。60年間に及ぶ父の写真家としての仕事は、「最も古くからあったプエブロ民族の義務」すなわち「あらゆるものに敬意を表すること」、なかでも「かつてここに存在し去って行った人たちがもどってきて、恵みの雨や雪を与えてくれることに對し敬意を表すること」につながっている。(12-13)

こうした背景を踏まえて「雨雲を届ける人」を読むと、そこに描かれた一日の出来事が、実はプエブロの長い歴史と世界観を凝縮したものであることが見えてくる。全訳に際しては、できるだけ原文に忠実でわかりやすい訳を心がけ、植物名や地形の名称など日本語に対応する名称がない場合は、原音に近いカタカナ表記をし、必要に応じて括弧づけで簡単な説明を加えた。全訳の後に、解説及び関連したテーマの扱われている作品紹介を、参考文献リストの後に、図版（地図と写真）と原文を添えた。

3. 「雨雲を届ける人」全訳

大きなコットンウッドの木の下に祖父はいた。色あせたブルーのリーバイスのジーンズ

をはいていたので、すぐに見つけることができた。その大きな木は、砂地の幅の広いアロヨ（干上がった川床）にポツンと立っていた。少し離れたところには、葉の落ちてしまったコットンウッドの小さな茂みがあった。亡くなってから丸一日かそれ以上経っていたのだろう。祖父が世話をしていたヒツジたちはあたりを歩き回り、アロヨのあちこちに散らばってしまっていた。レオンと義理の弟のケンは、散り散りになったヒツジを集め、放牧場の囲いの中に入れてしまうと、もう一度大きなコットンウッドの木のところに戻った。ケンがトラックを運転し、深い砂地を抜けてアロヨの端のところまでやってくるのを、レオンは木の下で待った。目を細めて太陽の方を見ると、レオンはジャケットのジッパーをおろした。この時期にしては本当に暑かった。それでも北西の方向にそびえる青い山並みはまだ雪に覆われていた。ケンは、ほろほろと砂の崩れる低い土手を、すべりながら50フィートほど下まで降りてきた。手には赤い毛布を持っていた。

祖父を毛布で包む前に、レオンはポケットから一本の紐を取り出し、小さな灰色の鳥の羽根を長い白髪に結びつけた。ケンは祖父の顔にペイントを施した。しわの寄った浅黒い額には白い線を、高いほお骨のところには青を一本、そこで手を止めてケンの方を見た。ケンは、灰色の羽根をひらひらと揺らしている風に向かって、トウモロコシの粉と花粉をひとつまみ投げた。レオンは、祖父の幅の広い鼻の下に黄色を塗り、最後に顎先に緑を一筋塗り終えると、微笑んだ。

「雨雲を届けてくださいね、おじいさん。」二人はトラックの荷台に毛布に包んだ祖父を寝かせ、分厚い防水シートで覆ってから、プエブロの居住地に向けて車を走らせた。

車はハイウェイを出て、プエブロ内の砂の道に入った。雑貨屋と郵便局を通り過ぎると間もなく、ポール神父の車がこちらに向かってやってくるのが見えた。二人に気づくと、ポール神父は車の速度を落とし、手で止まるように合図をした。若い神父は車の窓を開け、「テオフィロ爺さんは見つかったかい？」と大声でたずねた。

レオンは車を止め、「おはようございます。神父さん。今ヒツジの放牧場に行ってきたところです。もう大丈夫ですよ。」と言った。

「それはよかった。テオフィロはもう年だからね。一人でヒツジの番はさせない方がいい。」

「はい、もうしません。」

「そう、それならよかった。それじゃ、次のミサのときにね。この間は君たちが来なくて残念だったよ。テオフィロ爺さんも一緒に来るといい。」神父はそう言って微笑むと、手を振って二人が走り去るのを見送った。

家でルイズとテレサが待っていた。テーブルには昼食の用意ができていて、黒い鉄製のストーブの上でコーヒーが煮立っていた。レオンはまずルイズに目を向け、それからテレサを見た。

「ヒツジの放牧場のそばの大きなアロヨにね、コットンウッドの木があって、その下にいたんだ。木陰で一休みしようと腰を下ろして、そのまま起き上がることはなかったんだね。」レオンは祖父のベッドの方へ歩いて行った。赤い格子柄のショールが、しわを伸ばしてベッドの上にきちんと広げてあり、枕の横には、新しい茶色のフランネルのシャツと新品のごわごわしたリーバイスのジーンズがきれいにたたんで置かれていた。レオンとケン

が赤い毛布に包まれた祖父を運び入れる間、ルイズは網戸を押さえて開けておいた。祖父は小さくて、縮んでしまったように見えた。新しいシャツとズボンに着替えさせると、さらに小さくなったように見えた。

教会の鐘が昼の祈りの時刻を告げ、正午であることがわかった。4人は何も言わずに焼きたてのパンと豆のシチューを食べ、テレサがコーヒーを注ぐまで口を開かなかった。

ケン is 立ち上がり、ジャケットを着ながら言った。「墓掘り人を頼んで来よう。凍っているのは土の表面だけだから、日が暮れるまでには準備ができるだろう。」

レオンはうなずいて、コーヒーを飲み干した。ケンが出かけてしばらくすると、近所の人や親類が静かにやって来て、テオフィロの家族の肩を抱き、テーブルに食べ物を置いて帰って行った。あとで、仕事を終えた墓掘り人たちがやって来て、そこで食事をする事になっている。

西の空は一面、淡い夕焼けの色に染まっていた。ルイズはレオンのだぶだぶのアーミー・ジャケットをはおり、ポケットに手を突っ込んで立っていた。葬儀は終わり、年寄りたちはろうそくと儀式用のメディスン・バッグを持って出て行った。

ルイズは、祖父の遺体がトラックに積み込まれるまで黙っていた。ルイズがレオンの腕に手を触れたとき、レオンは、祖父のまわりに撒いたトウモロコシの粉がまだその手についているのに気づいた。ルイズが何か言ったが、レオンには聞こえなかった。

「なんて言った？ 聞こえなかったよ。」

「考えてたことがあるって言ったのよ。」

「どんなこと？」

「神父さんに聖水を撒いてもらえないかしらって。おじいさん、喉が渇かないように。」

レオンは、テオフィロ爺さんが夏の祭りで踊る時のために作っておいた、新しいモカシンの靴を見つめた。靴は、赤い毛布にほとんど隠れてしまっていた。あたりは冷え込み、風がプエブロの細い道に灰色の砂埃を吹き下ろしていた。冬の間、太陽はメイサ（長いテーブル状の台地）の一点に沈むのだが、今そこに近づいているところだった。ルイズは震えながら、レオンの顔を見つめて立っていた。レオンはジャケットのジッパーを閉め、トラックのドアを開けた。「神父さんがいるかどうか見てこよう。」

ケンは教会のところでトラックを止め、レオンを降ろすと、みんなが待っている墓地に向かって車を走らせた。レオンは、キリストのシンボルが彫刻してある木のドアをノックした。待っている間、昔スペイン国王から送られたという一対の鐘を見上げると、鐘楼の中に最後の夕日が注ぎ込み、鐘のまわりを照らしていた。

神父はドアを開けて、レオンだとわかったと微笑んだ。「さあ、中へ。今夜はどんな用件かな？」

神父は台所の方へ歩いて行き、レオンは帽子を手に持って、耳あてをいじりながら居間の方に目をやった。茶色のソファ、緑の肘掛け椅子、それに鎖で天井から吊るしてある真鍮のランプ。神父は、台所から椅子を引っばってきて、レオンに勧めた。

「ありがとうございます。椅子は結構です、神父さん。墓地で聖水を撒いていただけないか頼みに来ただけなので。」

神父はレオンに背を向けると、窓の向こうの陰になっている中庭と、その向こうにある修道院の食堂の方を見た。分厚いカーテンが中からの光を遮って、夕食中の修道女たちの姿は見えなかった。「なぜテオフィロが死んだことを黙ってたんだい？ 臨終の儀式をしてあげられたのに。」

レオンは微笑んで言った。「それは必要ではなかったの。」

神父は、踵のすり減った茶色の室内履きと司祭服のすり切れた裾を見つめていた。「キリスト教の埋葬には必要なことだったんだよ。」神父の声は、親しさを失い、冷ややかになった。レオンは、その青い瞳が疲れているようと思った。

「大丈夫ですよ、神父さん。ただ、おじいさんにたくさん水をあげたいだけなのですから。」

神父は緑色の椅子に深く腰を下ろして、光沢紙に印刷してある布教用の雑誌を取り上げた。ハンセン病患者や異教徒のカラー写真がたくさん載っているページをめくっていたが、写真を見ているわけではなかった。

「いいかい、レオン。それはできないことなんだよ。少なくとも、臨終の儀式と葬儀のミサだけはしなければいけなかったのだから。」

レオンは緑の帽子をかぶり、耳当てを降ろした。「遅くなります。行かなくては。」

レオンがドアを開けると、ポール神父は立ち上がって「待ちなさい」と言った。神父は部屋を出て行き、長い茶色のコートを着て戻って来た。レオンのあとについて、薄暗くなった教会の庭を横切り、アドーベ（日干しレンガ）でできた正面の階段の方へと歩いて行った。二人とも、背の低いアーチ型のアドーベの門をかがんで通り抜けた。丘を降りて墓地に向かう頃には、メイサの上にあった太陽は半分沈んでいた。

神父は、凍った土をどうやって掘ったのだろうといぶかしみながら、ゆっくりと墓穴に近づいた。それから、ここはニューメキシコだということを思い出した。穴の脇には、解けてやわらかくなった冷たい砂が積み上げられていた。そこに集まって立っているみんなの顔からは、蒸気が立ち上っていた。みんなの方に目をやると、墓地に生えている黄色く乾いたタンブルウィード（回転草）の茂みの中に、上着や手袋やスカーフが重ねて置いてあるのが見えた。それから赤い毛布の包みに目をやると、テオフィロ爺さんは妙に小さく見えて、疑念が浮かんでくるのだった。この埋葬はよこしまなインディアンの方針で、実は、毎年3月に豊かな収穫を祈って行なう祭りと同じことをしているのではないかと。テオフィロ爺さんは、今も放牧場にいて、ヒツジたちを夜になる前に囲いの中に入れようとしているのではないかと。それなのに、自分は今、冷たく乾いた風に向かって、沈む夕陽に目を細めながら、赤い毛布の包みを埋葬する準備をしている。一方、教区民たちは夕陽に背を向けているので、影になって顔が見えなかった。

神父の指は寒さでかじかみ、聖水の入った容器の蓋をまわして開けるのに時間がかかった。水滴が赤い毛布に落ちると、しみ込んで凍り、暗い色のシミになった。神父が墓穴に水を撒くと、その水は、ほんやりと見える冷たい砂地に届く前に、蒸発して消えてしまうようだった。その光景を見て、神父は何かを思い出しそうになった。それがわかれば今ここで起きていることが理解できるような気がして、神父は思い出そうと努めた。さらに水を撒き、容器が空になるまで振った。その水が夕陽の中を落ちていく様子は、太陽の照っているときに降る8月の雨が、しおれたスクワッシュ（カボチャなどウリ科の植物の総称）

の花に届く前にほとんど蒸発してしまうように似ていた。

風が吹いて、神父の茶色い法衣の裾をはためかせ、毛布の上に撒かれたトウモロコシの粉や花粉を巻き上げた。みんなは毛布の包みを地面に降ろし、包みの両端に硬く結んだ新品のロープの結び目をわざわざ解くことはせず、そのままにしておいた。太陽は沈み、東に向かうハイウェイは車のヘッドライトでいっぱいだった。神父はゆっくりと歩いてその場を離れた。神父が丘を登り、背の高い分厚い塀の向こうに見えなくなると、レオンは向きを変えて、深い雪に覆われた青白い山並みを見上げた。西に沈んだ夕陽のかすかな光を受けて、山は輝いていた。レオンは、すべてが無事終わったので気分がよかった。聖水を撒いてもらったのもうれしかった。さあ、これでお爺さんはきっと大きな雷雲を届けてくれるだろう。

4. 作品解説

「雨雲を届ける人」は、ヒツジの放牧場から帰らない祖父を探しに行った二人の若者、レオンとケンが、コットンウッド（cottonwood）の木の下で座ったまま亡くなっている祖父を見つけるところから始まる。原文ではシープ・キャンプ（sheep camp）という言葉が使われており、そこに寝泊まりしてヒツジの世話をしていたことがわかる。（写真3）現地の人々にコットンウッドと呼ばれているのは、ヤナギ科ヤマナラシ属の木で、学名は“Populus Fremontii”という。乾燥した米国南西部で川や泉など水源の近くに育ち、昔この地を旅する人は水を求めてこの木を探しながら歩いたので、「水の木」(water tree) というニックネームもある。この土地に古くから暮らしていた先住民は、樹皮を怪我や病気の治療に用いたり、ホピ族のように木彫のカチーナ（精霊）人形を作ったり、カリフォルニアの部族のように根で籠を編むのに用いたそうだ。秋には葉が黄色く色づき、冬になると葉をすべて落とし、春に白い綿毛のような花穂をつけるのでコットンウッドという名がついたという。「ハコヤナギ」や「ボブラ」といった和訳の載っている辞書もあるが、ニューメキシコ州に育つコットンウッドとは異なるため、翻訳に際しては現地の人々がこの木を呼ぶときに使う英語名をそのまま用いた。^(注5) (写真4)

祖父は、アメリカ南西部の乾燥地帯によく見られるアロヨ（arroyo）またはウォッシュ（wash）と呼ばれる「涸れ谷／干上がった川床」の木の下で亡くなった。ラグーナの土地の多くは砂岩でできているため、このアロヨもその周囲の土地も砂地であることが、描写からわかる。ニューメキシコは、年間降水量の非常に少ない乾燥地帯で、あちこちにアロヨが見られるが、夏の夕方には局地的なわか雨が降り、アロヨが一時的に水の溢れる川になることもある。山に降った雨や雪が大地にしみ込み、地下には大きな帯水層があると言われている。そのため、地表に水のないところでもコットンウッドの木はあり、初めてこの地を訪れたときには、乾燥地帯でありながら緑が多いのが印象的だったのを覚えている。冒頭のシーンは、アロヨにある「水の木」と呼ばれるコットンウッドの下で亡くなった祖父が、やがてこの乾いた土地に雨雲を届けてくれるという、プエブロの世界観を暗示していると言えるだろう。

二人の若者は祖父の死をごく自然に受け止め、すぐにその顔にペイントを施し、トウモロコシの粉と花粉を撒いて伝統の儀式を執り行う。乾燥した土地にもよく育つトウモロコ

シは、プエブロの人々にとって神聖な植物で、大切な命の糧でもある。トゥモロコシは、豆類やスクワッシュ（ウリ科の総称）とともに栽培することで、お互いの生育を助け、土壌を守る。また、ともに食することで栄養価を補い合う。早くからこうした効果を知っていた北米の先住民は、この3種をスリー・シスターズ（three sisters）と呼んで大切にしてきた。物語や神話にもよく登場する。この作品の中では、祖父の葬儀に撒くトゥモロコシの粉（corn meal）、レオンたちが家で昼食に食べる豆のシチュー（beans）、そして埋葬のときに8月の雨とともに思い出されるスクワッシュの花（squash flowers）として、それぞれがごく自然に登場し、プエブロの生活に切り離せないものであることを感じさせてくれる。^(注6)

そして、一連の儀式を終えたとき、レオンはごく自然に「おじいさん、雨雲を届けてくださいね」と語りかける。トラックに毛布でくるんだ祖父の遺体を載せて帰る途中神父に出会い、言葉を交わすのだが、祖父の死は告げずに去って行く。「おじいさん、雨雲を届けてくださいね」という言葉の背後にあるプエブロの世界観については、次の章でもう一度詳しく取り上げるが、ここでは、プエブロの保留地にあるカトリック教会について少し説明しておくことにする。ニューメキシコの19のプエブロには異なるキリスト教の聖人を守る守護聖人として祀る古いアドーベ（日干しレンガ）づくりの教会があり、その聖人の祝祭日にお祭りを開く。ラゲーナの守護聖人は、聖ヨセフ（St. Joseph）で、春と秋にお祭りがある。ラゲーナの今の教会は1811年に建てられたものだが、祭壇は最初の教会が建てられた18世紀初頭のものがそのまま残されている。ラゲーナの人々の間にカトリックの伝道が始まったのはプエブロの中でもっとも遅い1699年である。漆喰の壁に描かれたモチーフはラゲーナ・プエブロ独自の植物や鳥や独自の幾何学模様を描いたもので、今もプエブロ住民が毎年壁と床を塗り替えるという。（加藤 119）（写真5）

長い歴史の中で、カトリック教会はプエブロの生活に根付き、神父がプエブロの住民の日々の暮らしぶりを把握し、気にかけている様子が、この短篇からも伺える。しかし、神父とレオンのやり取りに注目すると、レオンが、神父に嘘をつくことなく、祖父が亡くなったという事実を伝えていないことがわかる。テオフィロ老人の安否を気遣い、「もう老人に一人でヒツジの番をさせない方がいい」（“You really shouldn't allow him to stay at the sheep camp.”）と忠告する神父に対して、レオンは「はい、もうしません」（“No, he won't do that any more.”）と告げるだけで、祖父が亡くなったことを伝えていない。主語を省略する日本語では「もうしません」の主語が曖昧になるが、原文では主語は明らかにテオフィロ老人であり、レオンは「おじいさんはもうヒツジの番に行くことはない」と答えているのである。神父はレオンの返答に満足し、それ以上老人の安否をたずねることはしない。次のミサには老人も一緒に連れてくるようにと誘う神父に、レオンは答えず去って行く。祖父をプエブロの伝統的な方法で送ることが、レオンにとってはごく自然なことなのであり、すでに祖父を見つけた場所で死者への伝統的な儀礼を済ませている。そのことが、読者にはわかるが、神父にはわからない展開になっている。

その後、祖父の埋葬の準備が進む中、孫たちは聖水（holy water）を撒いてもらうことを思いつき、レオンが神父に頼みに行く。このシーンでシルコーは、レオンと神父のやり取りが始まる前に、レオンの目を通して、キリストのシンボル（symbols of the Lamb）が彫刻してある教会のドアや、昔スペイン王に贈られたという鐘を描写し、スペイン支配と

カトリックの影響を受け続けてきたプエブロの長い歴史を思い起こさせているように見える。ちなみに、この教会のドアは18世紀に教会が建てられた時の彫刻を正確に復元したものであり、一方のドアには司教の冠や杖とともに、羊飼いの杖も刻まれている。(写真6)

神父は、老人の死を知らせずカトリックの決まりを無視して埋葬の準備をしてしまったことを咎め、すぐにはレオンの求めに応じようとしな。しつこく請うことなく帰りかけたレオンを追って、結局神父は聖水を持って埋葬の場にやってくるのだが、そこに集まった村人を前にして、本当にこれは老人の埋葬なのだろうかと疑念を抱く。今日の前で行われているのは、実は毎年3月のお祭りの日に収穫を願って行われている儀礼なのではないか。老人の埋葬の振りをして、実は収穫を祈る3月の儀式を執り行っているのではないかと疑うのである。老人の埋葬の前に、なぜカトリックの儀礼をせずに聖水だけを撒いてほしいのか、神父にはその真意が理解できない。大地に吸い込まれるように蒸発していく水を見て、何かを思い出しそうになるが、結局神父は、乾いた大地で長い時間をかけて育まれた命と水の循環するプエブロの世界観と、祭儀や踊りとのつながりを理解することはできず、求められるままに聖水を撒き、その場を去って行く。

一方、レオンは、埋葬が無事終了したことにほっとし、聖水を撒いてもらったことで、おじいさんはきっと「大きな雷雲」を運んできてくれるだろう、と喜んでいる。冒頭のシーンで祖父に呼びかけたときには「雨雲」だったのが、ここでは「大きな雷雲」になっていることにも注目したい。祈りや儀式の力を信じるプエブロの人々が、カトリックの聖水散布をごく自然に埋葬の儀式に取り入れていることがわかる。亡くなった老人も若者たちも教会のミサにときどき出ていることが始めの方に書かれている。神父とプエブロの人々の関係は決して悪いものではないのだが、プエブロの世界観、特に死者と水とのつながりを理解できずに疑念を抱く神父と、プエブロの慣習の中にカトリックの聖水を柔軟に取り込んでしまう若者との間のギャップが印象的である。

なお、この作品の冒頭と終わりのシーンでレオンが見上げる「青い山並み」(blue mountains)とは、ラグーナの北西部にそびえるサンマテオ山脈で、その南西部に、プエブロを始めとするこの地域の先住民の聖地であるテイラー山 (Mt. Taylor) がある。20世紀初頭に、一方的に国営林に指定されてしまったが、1978年に「アメリカ・インディアン宗教自由条例」 (The American Indian Religious Freedom Act) が制定され、聖地としての見直しが進められてきた。一方、この聖地付近でウラン鉱山を再開する動きがあり、反対運動が高まる中、2009年にテイラー山が伝統文化財 (a Traditional Cultural Property) の指定を受け、鉱山再開に歯止めをかけることになった。しかし、ウラン鉱山の再開発に関しては予断を許さない状況が続いている。^(注7)

作品解説の最後に、筆者が何度か訪れたラグーナ・プエブロのお祭りについて、書き添えておくことにする。毎年3月19日と9月19日の守護聖人の日に行われるお祭りは、朝の教会のミサと、守護聖人の像をプラザまで運ぶ行進 (procession) で始まる。プラザに設置されたあずまの祭壇に聖人像を置いて供え物をし、その前で一日中踊りが続く。そして夕方、再び聖人像を教会に運ぶ行進があり、教会での挨拶でお祭りの一日が終わる。

一見カトリックの影響が色濃く、教会中心という印象を受けるが、太鼓の音の響く教会のミサではプエブロのリーダーたちが中心的な役割を果たし、ケレス語で話していた。プ

ラザまでの行進は、守護聖人の像を抱えたリーダーたちを先頭に、先住民の太鼓や歌に合わせて行われる。いつも教会の中で過ごす守護聖人にプエブロの空と大地と踊りを見せて、大切なつながりを思い出させているかのような印象を受けるとともに、カトリックの聖人を精霊と同様に敬い、その加護に対し感謝と祈りを捧げているようにも見えた。

踊りの中には、シカやワシやバッファローに扮して踊る動物の踊りや、リーダーを中心に輪になって大勢が踊るコミュニティ・ダンスなどがある。コミュニティ・ダンスの踊り手は、スペイン風の衣装とプエブロの伝統的な装飾品を身につけ、リーダーたちの太鼓の音と歌に合わせて足踏みをし、大地を踏みしめながら踊る。踊りは「つながり」を「思い出す」行為であり、それを次の世代に「つなげる」ために、毎年繰り返行われているのだという。(Cajete 632)

ミサを終えた神父は踊りを見学しながらプエブロの人たちと歓談していた。踊りの最中に、今まで晴れていた空に大きな雲がわき上がり、雨を降らせることもあった。カトリックに対し受容の姿勢を見せてきたプエブロの知恵と寛容、そしてプエブロの文化を次第に受け入れ土着化したカトリック、その両者が長い時間をかけて育んだ文化の中で、一方が他方を改宗させ支配するという構図は完全に崩れているのを感じた。

5. 水と命の物語

すでに述べたように、シルコーは実際に起きた話をもとに、わからない部分は想像力で補い、「雨雲を届ける人」を書いた。その想像力の根底には、20歳のシルコーの中にすでにしっかりと継承されていた水と命をめぐるプエブロの世界観がある。ここでは、あまり知られていない『聖なる水の話』(Sacred Water 1993)と、「メモワール」というサブタイトルのついている最新作『トルコ石の鉱脈』(The Turquoise Ledge 2010)の中で、シルコーが語る死者と雨雲の話の一部を紹介したい。

『聖なる水の話』は、あとがきによると、760頁に及ぶ大作『死者の暦』(Almanac of the Dead 1992)を書き上げた後、大きな出版社とのやりとりでうんざりしたシルコーが、本のデザインから装丁まで自分で決めて、本を作る楽しみを自分の手にとりもどそうと、手作りの限定版として刊行したものだという。昔聞いた水にまつわる話や、子ども時代から執筆当時までのさまざまな水をめぐる体験を書き留めた、80頁ほどのエッセイ集である。私の手元にあるのは第2版で、手作りではないが、やはり限定版として刊行されたものである。本を開くと片面に数行から10数行の文章があり、もう片面にはシルコー自身が撮影した雲や水辺や水辺の動植物の写真が載っている。入念な調査に基づいて書かれた『死者の暦』で、腐敗したアメリカ社会や政府を衝撃的に描き、最終章では世界から先住民や活動家が集結してくるという予言的なシーンを提示したシルコーは、『聖なる水の話』では、語りかけるような文体で、簡潔に、子ども時代を過ごしたプエブロや、その後移り住んだ場所を舞台に、雲、雨、水、乾燥地帯の動植物等をめぐる話を綴っている。

冒頭の雲の話の終わりの方に、先祖を大切にするプエブロの慣習についての話があり、そこで死者と雨雲に関する世界観が示されている。子どもの頃、食事の前に食卓で小さなお皿を回し、亡くなった家族の霊のためにみんなのお皿から少しずつ食べ物を集めたこと、毎年11月2日の死者の霊を祈る祭日には、かまどで焼いたパンと赤唐辛子のシチューをも

って墓地を訪れたこと、大人たちがこうして日常的に死者を敬い、心をこめて供え物をする様子を見ていたので、子どもの頃から死者は身近な存在で、怖いと思ったことはないこと、そしてその後に「死者は私たちのことを大切に思い、恵みの雨となってもどってきてくれる」と続く。(16-17)

前半で語られる水と先祖を大切にするプエブロの暮らしとは裏腹に、後半では深刻な水不足や環境汚染の現状も取り上げられ、核による放射能汚染への言及もある。ニューメキシコには、最初の原爆実験が行われたトリニティ・サイトや、核兵器開発の中心となった研究所のあるロスアラモスがあり、ラグーナにはウラン鉱山の採掘場跡がある。シルコーはその著作の中で、核の問題もいろいろな形で取り上げてきた。人間は自然界のすべてのものとつながっているというプエブロの世界観、特に水と命の物語を語るとき、シルコーが同時に強い警告を発していることを忘れてはならないだろう。

『トルコ石の鉱脈』は、プエブロの先祖が米国南西部の大地に暮らし始めた時代から現在までをカバーする壮大なメモワールで、全体を流れるテーマは「水と命」である。「先祖たち」と題する第1部をしめくくる章は、自然界にあるものはそっとしておくようにという昔の人の教えて始まり、ウラン鉱石も地中にそっとしておけば危険なものではなく、むしろそこから湧く泉には病を癒す効果があったと話す大叔母さんや、生涯に渡り泉の水を飲み、98歳まで生きた曾祖母の思い出が続く。(74)

第1部の冒頭には、プエブロを始めとする南西部の先住民たちが大切にしているトルコ石の話がある。トルコ石の生成には水が不可欠であることを知ったシルコーは、乾燥した大地に暮らす先祖たちが、この石を水とつながりのある特別な石と考え、儀式や踊りのときの装身具として身につけるようになったことに思いを馳せ、それは単にブルーやグリーンの色合いのためではなく、トルコ石のあるところに水があったからなのだと納得する。(6)

シルコー自身が体験したある日の出来事を紹介している章もある。現在暮らしているアリゾナ州の山のふもとで、ある日空を見上げ、雲の群れが動いていく姿を見ていたときのこと、他の大きな雲がどんどん移動して行く中で、一つの小さな雲が太陽の光を受けて輝きながらその場にとどまり、その美しさに見とれるシルコーの頭上で静かに雨を降らせ、やがて他の雲を追うように去って行ったというのである。そのことを後日ホピ族の学校を訪ねたときに話したところ、それを聞いた教員が、シルコーに自分の体験を語ってくれた。それは7歳になる息子が亡くなって1年ほどが過ぎた頃のこと、外で空を見上げると、小さな雲がちょうど自分の頭上でとどまり、小雨を降らせてから去って行ったという話だった。シルコーは、この話を「愛する家族や先祖たちは、大切な降雨をもたらす雲となって、その愛情を私たちに注いでくれる」と結んでいる。(写真7)

水と命の物語は、日常の生活の中で実体験と結びつきながら、いろいろなコンテクストにおいて語り継がれてきたのだろう。サンタクララ・プエブロ出身の建築家リナ・スウェンツェル (Rina Swentzel) は、あるビデオ・プログラムの中で、子ども時代を過ごした1940年代のプエブロの思い出を次のように語っている。

ある日学校に行く途中、空を見上げるととても素敵な雲が浮かんでいました。動き続け形を変え続けえる雲は、とても刺激的で間近に感じられ、エネルギーや生命力に

満ちていました。(中略) 私はすっかり見とれてしまい、30分ぐらいそこに立ち止まって雲を眺めていました。そのときおとなたちが話していたことがわかり始めたのです。人は死ぬとどうなるかということ。そのエネルギーは空に上り雲になる。そしてまたこの大地に降りてくるということ。こうして大地と空をめぐるエネルギーのサイクルが理解できたのです。

スウェンツェルは「プエブロの信仰の中心には、人間は自然界の力とつながっているという確信があり、だから人間存在の目指すことは、この全体感、宇宙との一体感を維持することなのだ」と続けている。彼女の語る話は、プエブロの子どもたちが日々の生活の中で、自然に触れ、年長者の話をきいて、そのことを学んでいく様子を伝えている。

シルコーも、『プエブロの想像力』の序文で、子どもたちの教育は、幼い頃祖父母の膝の上で過ごす時間から始まり、終わることなく、家の中も外もあらゆる場所が学校であり、誰もが、そしてあらゆるものが先生だったと回想する。(9) こうして日々の暮らしの中で身につけたプエブロの世界観が、シルコーの紡ぎ出す数々の物語の源泉となっているのである。

(注1) ニューメキシコとプエブロの歴史は、『接続』第5、7、8号に掲載された筆者の論考の中から、「雨雲を届ける人」の背景として重要だと思われる出来事を中心に整理し、補足・修正を施した。主に、以下の文献と、タオス・プエブロ出身のダイアン・レイナ監督によるドキュメンタリー映画「コロンブスを生き抜いてープエブロ民族の物語」(“Surviving Columbus: The Story of Pueblo People” 1992)を参考にしてている。

(1) プエブロの反乱からスペイン人の再征服まで (加藤、Sando)

(2) 1920年代のプエブロの危機 (Irwin, Rudnick, Sando, Suina, Szasz, Zumwalt)

(3) 1934年の再組織法とそれ以降 (阿部2005、上村、鎌田、清水、富田、Ballantine, Sando)

(注2) 1883年に定められアメリカ先住民の信仰の自由を脅かし続けた「インディアン宗教犯罪法」(The Indian Religious Crimes Code)はその後も残り、1978年に「アメリカ・インディアン宗教自由条例」(The American Indian Religious Freedom Act)が通過するまで存在したのである。(阿部、2005、216-218)

(注3) シートンとサンタフェ・インディアン・スクールに関しては、以下の文献を参考にしてている。

今泉『子どもに愛されたナチュラリスト シートン』

Anderson. *The Chief: Ernest Thompson Seton and the Changing West*

Heyer. *One House, One Voice, One Heart*

(注4) シルコーの生い立ちと経歴に関しては、以下の著作と文献を参考にしてまとめた。

Storyteller

Yellow Woman and a Beauty of the Spirit: Essays on Native American Life Today

Sacred Water

The Turquoise Ledge

Conversations with Leslie Marmon Silko (ed. by Ellen L. Arnold)

(注5) コットンウッドに関しては、以下のインターネット資料を参考にした。

Dunn, Carol. “Cottonwood Trees.”

<http://www.livingspace360.com/index.php/cottonwood-trees-11894/>

<2013/11/06>

Peterson, Beverly. “A ‘Water Tree’ grows in the desert.”

<http://www.yumasun.com/article/tree-72299-cottonwood-cottonwoods.html>

<2013/11/16>

「フレモントコットンウッド」植物図鑑 Weblio

<http://weblio.jp/content/フレモントコットンウッド> <2013/11/13>

- (注6) スリー・シスターズと呼ばれるトウモロコシ、豆、スクワッシュに関して、以下にまとめておく。この3種は、それぞれ種類が豊富で、例えば、米国南西部で栽培されるトウモロコシには、実の色が赤・青・黄・白と異なる種類があり、風味や含有される栄養素も異なる。スクワッシュにも多くの種類があり、ニューメキシコ在住の知人の話によると、先住民は自然受粉で育てるので、ひとつの蔓に種類の異なる実がなるといふ。また、3種と一緒に栽培することで、お互いの生育を助け、豊かな土壌を保つ効果がある。トウモロコシの茎は、豆の蔓に支柱を提供し、豆の蔓によって補強される。スクワッシュの大きな葉と地面を這う蔓は、土中の水分を逃がさず、日を遮って雑草のはびこるのを防ぐ。豆の根に共生する菌が窒素を取り込んで保存し、天然の肥料となる。また、3種はそれぞれ地中の異なる栄養素を必要とするため、お互いの生育を妨げない。こうした栽培上の効果だけでなく、3種の作物を食することで、異なる栄養素（トウモロコシの炭水化物、豆の蛋白質、スクワッシュのビタミン等）を摂取することができる。先住民は、昔から日々の生活の中でこうした効果に気づいており、土地に適した農法を見つけ、伝統的な知恵として、農業や食生活を通して後の世代に伝え、神話や物語として語り継いできた。

上の記述は、Bastian & Mitchell (73-64)、阿部 (2011、10-12) 及び以下のインターネット試料を参考にしている。

加藤昇「大豆の話」<http://www7b.biglobe.ne.jp/~rakusyotei/daizul-10.html> <2014/01.25>

Alice Formiga, “Celebrate the Three Sisters: Corn, Beans and Squash”

<http://www.renee'sgarden.com/articles/3sisters.html> <2013/12/15>

“Ancestral Pueblo Farming”

<http://www.nps.gov/band/historyculture/ancestral-pueblo-farming.htm>

<2013/12/15>

“Corn Facts”

<http://southwestheritagemill.com/non-gmo-corn> <2013/12/15>

- (注7) テイラー山に関する記述は、アルバカーキ市内にある SRIC (Southwest Research and Information Center) が年に4回発行していたニューズレター *Voices from the Earth* (summer 2008) の記事 “Protecting Mount Taylor” と、ウェブ資料 “Mount Taylor and the Pueblos” (Posted on February 7, 2012 by Ojibwa, <http://nativeamericannetroots.net/diary/1246>) を参考にした。

参考文献

阿部珠理『アメリカ先住民——民族再生に向けて』角川書店、2005年。

—『アメリカ先住民から学ぶ——その歴史と思想』NHK 出版、2011年。

今泉吉晴『子どもに愛されたナチュラリスト シートン』福音館、2002年。

上村英明『先住民の「近代史」——植民地主義を超えるために』平凡社、2001年。

加藤薫『ニューメキシコ——第四世界の多元文化』新評論、1998年。

鎌田遵『ネイティブ・アメリカン——先住民の現在』岩波新書、2009年。

茅野佳子「場所・人間・文学——アメリカ南西部の物語と環境公正運動」『接続』(vol. 5) ひつじ書房、2005年、34-70。

—「大国の内なる『マルチチュード』——ニューメキシコ州アルバカーキからの報告」『接続』(vol. 7) ひつじ書房、2007年、28-61。

—「プエブロの踊り—同化政策を生き抜いて」『接続』(vol.8) ひつじ書房、2008年、74-101。

清水和久『増補米国先住民の歴史——インディアンと呼ばれた人びとの苦難・抵抗・希望』明石書店、1986年。

富田虎男『アメリカ・インディアンの歴史』雄山閣、1997年。

「フレモントコットンウッド」植物図鑑 Weblio 辞書

<http://weblio.jp/content/フレモントコットンウッド> <2013/11/13>

Anderson, H. Allen. *The Chief: Ernset Thompson Seton*. College Station: Texas A & M UP, 1986.

“Ancestral Pueblo Farming”

<http://www.nps.gov/band/historyculture/ancestral-pueblo-farming.htm>

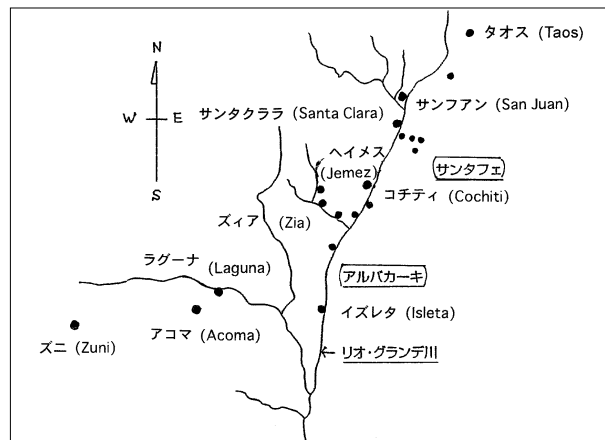
<2013/12/15>

Bahti, Tom and Mark Bahti. *Southwestern Indian Ceremonials*. Las Vegas: KC, 2004.

- Ballantine, Betty & Ian Ballantine, ed. *The Native Americans: An Illustrated History*. Atlanta: Turner Publishing, Inc. 1993.
- Bastian, Dawn E. & Judy K. Mitchell. *Handbook of Native American Mythology*. New York: Oxford U P. 2008.
- Cajete, Gregory. "Indigenous Education and Ecology: Perspectives of an American Indian Educator." *Indigenous Tradition and Ecology*. Cambridge: Harvard U P, 2001. 619-638.
- "Corn Facts" <http://southwestheritagemill.com/non-gmo-corn> <2013/12/15 >
- Dunn, Carol. "Cottonwood Trees." (published in July 15, 2010)
<http://www.livingspace360.com/index.php/cottonwood-trees-11894/> <2013/11/06>
- Formiga, Alice. "Celebrate the Three Sisters: Corn, Beans and Squash"
<http://www.renee'sgarden.com/articles/3sisters.html> <2013/12/15 >
- Hartz, Paula R. *Native American Religions*. New York: Fact On File, 1997.
- Heyer, Sally. *One House, One Voice, One Heart*. Santa Fe: Museum of New Mexico Press, 1990.
- Irwin, Lee. "Freedom, Law, and Prophecy: A Brief History of Native American Religious Resistance." *Native American Spirituality: A Critical Reader*. Ed. Lee Irwin. Lincoln: U of Nebraska P, 2000. 295-320.
- Marmon, Lee. *Pueblo Imagination: Landscape and Memory in the photography of Lee Marmon*. Text by Leslie Marmon Silko, Joy Harjo and Simon Ortiz. Boston: Beacon, 2003.
- "Mount Taylor and the Pueblos" (Posted on February 7, 2012 by Ojibwa)
<http://nativeamericannetroots.net/diary/1246> <2014/01/08>
- Peterson, Beverly. "A 'Water Tree' grows in the desert." *YumaSun.com* (published in August 18, 2011)
<http://www.yumasun.com/article/tree-72299-cottonwood-cottonwoods.html>.
 <2013/11/16 >
- "Protecting Mount Taylor." *Voices from the Earth* (Southwest Research and Information Center) 9.2 (summer 2008): 6-7.
- Sando, Joe. *Pueblo Nations: Eight Centuries of Pueblo Indian History*. Santa Fe: Clear Light, 1992.
- Salter, Gregory. *Leslie Marmon Silko*. New York: Twayne Publisher.
- Seyersted, Per. "Interview with Leslie Marmon Silko." *Conversations with Leslie Marmon Silko*. Ed. Ellen L. Arnold. Jackson: UP of Mississippi, 2000. 29-36.
- Silko, Leslie Marmon.
 -- *Almanac of the Dead*. Penguin. 1992.
 -- *Ceremony*. New York: Viking. 1997.
 -- Introduction. *The Pueblo Imagination: Landscape and Memory in the Photography of Lee Marmon*. Lee Marmon. 2003. 9-13.
 -- "The Man to Send Rain Clouds." *Storyteller*. New York: Arcade, 1992. 182-186.
 -- *Sacred Water*. Tucson: Flood Plain Press. 1993.
 -- *Storyteller*. New York: Arcade Publishing, 1981.
 -- *The Turquoise Ledge: A Memoir*. New York: Viking. 2010
 -- *Yellow Woman and a Beauty of the Spirit*. New York: Simon Schuster. 1996
- Suina, Joseph H. "Pueblo Secrecy Result of Intrusions" *New Mexico Magazine* January 1992: 60-63.
- "Surviving Columbus: The Story of the Pueblo People." (Film) Written by Larry Walsh. Directed by Diane Reyna. Produced by Edmund Ladd. KNME-TV 1992.
- Swentzell, Rina. "An Understated Sacredness" (video program) Produced by Michael Kamins. University of New Mexico, KNME-TV, 1990.
- Szasz, Margaret Connell. *Education and the American Indian: The Road to Self-Determination Since 1928*. 1974. Albuquerque: U of New Mexico P, 2003.
- Zumwalt, Rosemary Lévy. *Wealth and Rebellion: Elsie Clews Parsons, Anthropologist and Folklorist*. Urbana: U of Illinois P, 1992.



地図 1 アメリカ南西部



地図 2 ニューメキシコの 19 のプエブロ

(●印で示してあるのが各プエブロの位置)

* 加藤薫著『ニューメキシコ』(p.113) の地図をもとに作成した。



写真1 ラグーナの祝祭日のイーグル・ダンサー

"Laguna Fiesta with Eagle Dancers, 1951"
by Lee Marmon
(*Pueblo Imagination*, p.79)

* 若いシルコーが左奥で踊りを見ている。



写真2 ラグーナのバッファロー・ダンサー

"Laguna Buffalo Dancer, 1952"
by Lee Marmon
(*Pueblo Imagination*, p.145)



写真3 シープ・キャンプのベニーと馬

"Bennie with Horse at Sheep Camp, 1984"
by Lee Marmon
(*Pueblo Imagination*, p.35)



写真4 3月のコットンウッド

(2007年3月 撮影：茅野)

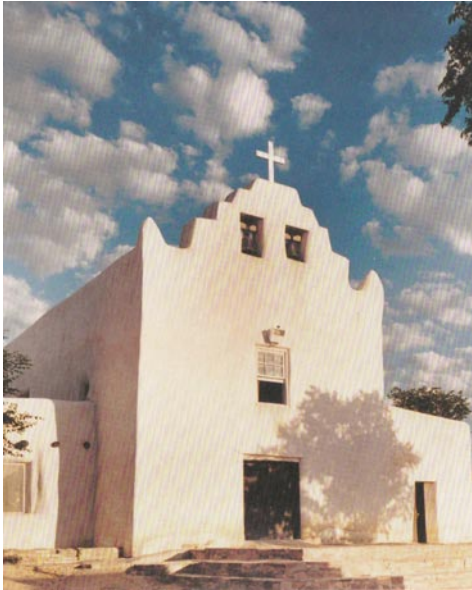


写真5 ラグーナ教会の300周年

"Laguna Mission 300th Anniversary, July 4, 1999)
by Lee Marmon
(*Pueblo Imagination*, p.42)



写真6 ラグーナ教会のドア

"Door at Laguna Mission, 1980)
by Lee Marmon
(*Pueblo Imagination*, p.45)



写真7 ニューメキシコの雲
——プエブロ集落の遺跡のあるチャコ・キャニオンにて
(2007年8月 撮影：茅野)

(原文)

THE MAN TO SEND RAIN CLOUDS

They found him under a big cottonwood tree. His Levi jacket and pants were faded light blue so that he had been easy to find. The big cottonwood tree stood apart from a small grove of winter-bare cottonwoods which grew in the wide, sandy arroyo. He had been dead for a day or more, and the sheep had wandered and scattered up and down the arroyo. Leon and his brother-in-law, Ken, gathered the sheep and left them in the pen at the sheep camp before they returned to the cottonwood tree. Leon waited under the tree while Ken drove the truck through the deep sand to the edge of the arroyo. He squinted up at the sun and unzipped his jacket—it sure was hot for this time of year. But high and northwest the blue mountains were still in snow. Ken came sliding down the low, crumbling bank about fifty yards down, and he was bringing the red blanket.

Before they wrapped the old man, Leon took a piece of string out of his pocket and tied a small gray feather in the old man's long white hair. Ken gave him the paint. Across the brown wrinkled forehead he drew a streak of white and along the high cheekbones he drew a strip of blue paint. He paused and watched Ken throw pinches of corn meal and pollen into the wind that fluttered the small gray feather. Then Leon painted with yellow under the old man's broad nose, and finally, when he had painted green across the chin, he smiled.

"Send us rain clouds, Grandfather." They laid the bundle in the back of the pickup and covered it with a heavy tarp before they started back to the pueblo.

They turned off the highway onto the sandy pueblo road. Not long after they passed the store and post office they saw Father Paul's car coming toward them. When he recognized their faces he slowed his car and waved for them to stop. The young priest rolled down the car window.

"Did you find old Teofilo?" he asked loudly.

Leon stopped the truck. "Good morning, Father. We were just out to the sheep camp. Everything is O.K. now."

"Thank God for that. Teofilo is a very old man. You really shouldn't allow him to stay at the sheep camp alone."

"No, he won't do that any more now."

"Well, I'm glad you understand. I hope I'll be seeing you at Mass this week—we missed you last Sunday. See if you can get old Teofilo to come with you." The priest smiled and waved at them as they drove away.

Louise and Teresa were waiting. The table was set for lunch, and the coffee was boiling on the black iron stove. Leon looked at Louise and then at Teresa.

"We found him under a cottonwood tree in the big arroyo near sheep camp. I guess he sat down to rest in the shade and never got up again." Leon walked toward the old man's bed. The red plaid shawl had been shaken and spreads carefully over the bed, and a new brown flannel shirt and pair of stiff new Levi's were arranged neatly beside the pillow. Louise held the screen door open while Leon and Ken carried in the red blanket. He looked small and shriveled, and after they dressed him in the new shirt and pants he seemed more shrunken.

It was noontime now because the church bells rang the Angelus. They ate the beans with hot bread, and nobody said anything until after Teresa poured the coffee.

Ken stood up and put on his jacket. "I'll see about the gravediggers. Only the top layer of soil is frozen. I think it can be ready before dark."

Leon nodded his head and finished his coffee. After Ken had been gone for a while, the neighbors and clanspeople came quietly to embrace Teofilo's family and to leave food on the table because the gravediggers would come to eat when they were finished.

The sky in the west was full of pale yellow light. Louise stood outside with her hands in the pockets of Leon's green army jacket that was too big for her. The funeral was over, and the old men had taken their candles and medicine bags and were gone. She waited until the body was laid into the pickup before she said anything to Leon. She touched his arm, and he noticed that her hands were still dusty from the corn meal that she had sprinkled around the old man. When she spoke, Leon could not hear her.

"What did you say? I didn't hear you."

"I said that I had been thinking about something."

"About what?"

"About the priest sprinkling holy water for Grandpa. So he won't be thirsty."

Leon stared at the new moccasins that Teofilo had made for the ceremonial dances in the summer. They were nearly hidden by the red blanket. It was getting colder, and the wind pushed gray dust down the narrow pueblo road. The sun was approaching the long mesa where it disappeared during the winter. Louise stood there shivering and watching his face. Then he zipped up his jacket and opened the truck door. "I'll see if he's there."

Ken stopped the pickup at the church, and Leon got out; and then Ken drove down the hill to the graveyard where people were waiting. Leon knocked at the old carved door with its symbols of the Lamb. While he waited he looked up at the twin bells from the king of Spain with the last sunlight pouring around them in their tower.

The priest opened the door and smiled when he saw who it was. "Come in! What brings you here this evening?"

The priest walked toward the kitchen, and Leon stood with his cap in his hand, playing with the earflaps and examining the living room—the brown sofa, the green armchair, and the brass lamp that hung down from the ceiling by links of chain. The priest dragged a chair out of the kitchen and offered it to Leon.

"No thank you, Father. I only came to ask you if you would bring your holy water to the graveyard."

The priest turned away from Leon and looked out the window at the patio full of shadows and the dining-room windows of the nuns' cloister across the patio. The curtains were heavy, and the light from within faintly penetrated; it was impossible to see the nuns inside eating supper. "Why didn't you tell me he was dead? I could have brought the Last Rites anyway."

Leon smiled. "It wasn't necessary, Father."

The priest stared down at his scuffed brown loafers and the worn hem of his cassock. "For a Christian burial it was necessary."

His voice was distant, and Leon thought that his blue eyes looked tired.

"It's O.K. Father, we just want him to have plenty of water."

The priest sank down into the green chair and picked up a glossy missionary magazine. He turned the colored pages full of lepers and pagans without looking at them.

"You know I can't do that, Leon. There should have been the Last Rites and a funeral Mass at the very least."

Leon put on his green cap and pulled the flaps down over his ears. "It's getting late, Father. I've got to go."

When Leon opened the door Father Paul stood up and said, "Wait." He left the room and came back wearing a long brown overcoat. He followed Leon out the door and across the dim churchyard to the adobe steps in front of the church. They both stooped to fit through the low adobe entrance. And when they started down the hill to the graveyard only half of the sun was visible above the mesa.

The priest approached the grave slowly, wondering how they had managed to dig into the frozen ground; and then he remembered that this was New Mexico, and saw the pile of cold loose sand beside the hole. The people stood close to each other with little clouds of steam puffing from

their faces. The priest looked at them and saw a pile of jackets, gloves, and scarves in the yellow, dry tumbleweeds that grew in the graveyard. He looked at the red blanket, not sure that Teofilo was so small, wondering if it wasn't some perverse Indian trick—something they did in March to ensure a good harvest—wondering if maybe old Teofilo was actually at sheep camp corralling the sheep for the night. But there he was, facing into a cold dry wind and squinting at the last sunlight, ready to bury a red wool blanket while the faces of his parishioners were in shadow with the last warmth of the sun on their backs.

His fingers were stiff, and it took him a long time to twist the lid off the holy water. Drops of water fell on the red blanket and soaked into dark icy spots. He sprinkled the grave and the water disappeared almost before it touched the dim, cold sand; it reminded him of something—he tried to remember what it was, because he thought if he could remember he might understand this. He sprinkled more water; he shook the container until it was empty, and the water fell through the light from sundown like August rain that fell while the sun was still shining, almost evaporating before it touched the wilted squash flowers.

The wind pulled at the priest's brown Franciscan robe and swirled away the corn meal and pollen that had been sprinkled on the blanket. They lowered the bundle into the ground, and they didn't bother to unite the stiff pieces of new rope that were tied around the ends of the blanket. The sun was gone, and over on the highway the eastbound lane was full of headlights. The priest walked away slowly. Leon watched him climb the hill, and when he had disappeared within the tall, thick walls, Leon turned to look up at the high blue mountains in the deep snow that reflected a faint red light from the west. He felt good because it was finished, and he was happy about the sprinkling of the holy water; now the old man could send them big thunderclouds for sure.

from *Storyteller* (1981), 182-186.

謝辞

本研究ノートは、2006年度のフルブライト研究員プログラムと明星大学特別研究員制度によって実現したニューメキシコ州での1年間の研究・調査と、その後断続的に続けてきた現地での研究・調査の成果の一部です。ご協力いただいた多くの方々、及び本研究ノートを書くにあたり情報や助言をいただいた方々に、この場を借りて謝意を表します。